

よそからお話会の依頼をいただいたときは開始時間だけでなく必ず終了予定時間を聞いておく。

学校の場合は45分がふつう。

低学年、中学年、高学年と別々に三回やらせてもらっても、一回は45分だ。

学校でするときは、終了時にチャイムが鳴るか鳴らないかを聞いておく必要がある。

もしチャイムが鳴ることになっていて、その部屋だけチャイムを切っておくことが可能なら、それはお願いした方がいい。

ものがたりの最後の一番盛り上がっているところでチャイムが鳴ったら、すべての魔法はとけてしまう。

まして、おばけ話だったりしたら、恐怖は一気に笑いに変わり、なんともみじめなことになってしまう。

理想は「めでたしめでたし、おしまい」と頭を下げたところで拍手にかぶさるようにチャイムが鳴ることで、ときどきそのタイミングがみごとに決まると、先生たちに「そこまで計算しているのですか!」と驚かれるが、さすがに秒単位までは考えていない。ずれ込んだ時のリスクが大きすぎる。

ぼくの場合は最後の話が5分前に終わるようにし、最後は「おまけの短い話」とかみんなでする参加型のことばあそびとかにしている。

時間調整の意味もあるし、なんとなく、もう、ものがたりの旅は終わりだよと別れを惜んでいる気分もある。

学校でなく、自由参加型の図書館や公民館でのものがたりライブでも終了時間の厳守は重要だ。

こちらは60分か90分が多い。

土曜日や日曜日にわざわざ図書館まで来てくれるのは基本的にものがたりや本が好きな子とその家族だ。

せっかくだらうをつけて来てもらったのに45分では2話しかできなくて申し訳ないし、また、その倍の90分でも聞ける人たちの集まりだと推察できる。

で、その時間は事前に主催者である図書館や公民館と相談する。

ぼくは60分でも90分でもどちらでもオーケー。

ものがたりライブ60分のあと、10分の休憩でもものがたりについての講演60分とかもできる。

ずっと立ちっぱなし。

そのうち、もっと年にとって立っているのがつらくなってきたら、すわらせてもらうかもしれないが、まだ立ってられるうちは立ってやっている。その方が遠くの人からもよく見えるし、ぼくは身振り手振りが多い方だから見やすいと思う。

立っている方が腹から声をだしやすいというものもある。

時間の話に戻して、ものがたりライブ90分、講演90分の両方を一気にでもやれるが、

これは聞く側の方が大変なので考えてしまう。

せめてものことに午前と午後に分けてもらうのがふつうだ。

で、開演時間と終演時間が決まって、それをチラシに書かれたら、とにかく時間を守るのが第一の使命になる。

来てくれた人の中には当然、次の予定がある人がいる。

帰りの電車の時間を決めている人もいる。

これが東京や大阪なら五分待てば次の電車があるが、地方では一時間に一本というのも珍しくない。

車の人でも近くの貸し駐車場に停めてきた人は30分すぎれば料金が上がるから予定外のよぶんな出費をさせることになるかもしれない。

話がはずんで終演が5分延びるのはまあ仕方ないとしても、10分以上はだめだ。それ以上になると、やむなく席を立つ人も出てきて、そのそわそわした感じは他の人にも伝染してしまう。

どうしても、今日はこれをやりたい、聞いてもらいたいという話があるなら、前もって他の話をはしょるとかの段取りをどこかでしておかなければいけない。

いくら、いい話だと思っても、それで人の予定を狂わせてはいけないのだ。

で、自分一人の会ならそういうことだが、これも何人かでするお話会ではこまかく気を使う必要がある。

全体の時間が押しているとなった時、ぼくは自分の出番がまんなかへんなら短めの話に切り替えて、あとの人の時間をかせぐ。

それが可能ならとちゅうを、一行ずつ、はしょることもする。

もちろん、聞いている人にはわからないようにだ。

さすがに講談のように「長い話のなかほどでございます」ととちゅうでおしまいにしたことはないけれど。

これは野球で言う犠打だ。

とにかく、語る自分の喜びと、聞く客の幸せをはかりにかけながらそれなりの着地点に向けて、お話会は進行しなければいけないのだ。

で、前回のエッセイの続きになる。

ある町の会のお話会に他の人に交じって出て一話語ってほしいと頼まれた。

ぼくの持ち時間は20分と決まった。

出番は相談の結果、ラストの人のひとつ前になった。

ゲストという扱いだ。

先方は最初、ぼくをたてて「一番最後で」と言ってくれたのだが、ぼくは基本的に旅人で、これが終わったらもう、いなくなってしまう人間だ。

それよりも、最後は地元の人がしめた方が、地元の今後のためにもいい。かわいいホールだが階段式固定座席のそれなりのステージだし、晴れの舞台だ。で、最後のひとつ前でやらせてもらうことにした。

当日、行ってみたら、最後の人は地元の図書館の読み語りサークルの

若いおかあさんだった。

期待の星でますますいい。

聞けばその人が語るのは地元の昔の哀話だという。

哀話とということなので、ぼくの方は

現代の八ヶ岳のホラ話をして、みんなに笑ってもらった。

ふんわり笑ってもらって、「今日は笑い関係はぼくでおわりですよ、

あとはじっくり聞いてくださいね」と、バランスをとったつもりだ。

主催者にわがままを聞いてもらって、チラシでは

ぼくのタイトルは「おたのしみ」と書いてもらったのは

こういう調整をとるためだ。

「おはなしひとつ」としてもらうこともある。

で、最後のおかあさんの話は「川に大水が出た折、人柱にされてしまった

かわいそうな娘の話」だったが、長すぎず短すぎず、くさくならず、

しかも時間ピッタリに終らせて、いいできた。

品のいい会になった。